

祓川の渡船哀話 わたしぶねあいわ — 竹川 —

町内を流れる祓川は櫛田川の分流で全長およそ十四キロメートル、
中海、佐田、前野、養川、浜田を経て伊勢湾に注いでいます。

現在はこの川にもコンクリート橋がいくつも架けられています、
天正年間（安土、桃山時代）に松阪の稲木から斎宮竹川に入る新参宮
街道ができてから、紀州候がきしゅうこうこの川に渡船場をつくり、舟を渡して舟
賃を取っていました。

ある年のこと、ひどい嵐にみまわれ、祓川は水かさが増え、大洪水
の状態でした。

祓川東岸の宿に泊っていた三十人の参宮道者は、やみそうもない雨
を見つめて困っていました。

そうして、嵐が去ったあとでも増水と濁流で、とても舟など出せない
状態でした。

幾日も水が引けるのを待っていましたが、とうとうシビレをきらして、
「今日こそはぜひ渡してほしい。」

「一番のりをして早く国へ帰りたい。」

と船頭さんに頼みました。





長い間、船頭をしている^{わたかかんべえ}脇田勘兵衛さんは
「この水ではダメだ!」
と断りました。

けれども客は引きさがらなかったで、とうとう勘兵衛さんは
「それでは渡してあげよう。しかしわたしと一緒に水死してもうらみませんか。」
と言って舟を出しました。

勘兵衛さんが決死を承知でろをこいだのはいうまでもありません。

川の中ほどにさしかかった時、うずを巻く濁流にアッという間に全員呑
まれてしまいました。

「大変や!」

「えらいことや!」

と、かけつけた船頭たちは、下流をくまなくさがし、全員の死体を引き揚
げました。

そうして三十一人の死体をてあつく^{ほうご}葬っているところへ、遺族がかけつ
けてきました。遺族は、身内の不幸を悲しむよりも、無理をたのんで大難
を巻き起したといって、亡くなった勘兵衛さんや船頭たちに深く頭を下げ
ました。

何度も何度も詫^わびをいい、大金をお礼において国へ帰っていきました。

船頭たちはそのお金で、毎年命日には追善供養^{ついでんくよう}を営み、当時の想い出
を語り明かしてきたということです。



キーワード：みんわ、竹川、祓川、伊勢街道、お伊勢参り

このお話は、昭和56年に発行された書籍「明和のみんわ」(野田那智子さん編著)をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしょうしています。